



須磨寺三重塔本尊 金剛界大日如来

青葉の笛だより

第13号

平成26年7月号

発行所：大本山 須磨寺

〒654-0071

神戸市須磨区須磨寺町4-6-8

TEL 078-731-0416(代)

<http://www.sumadera.or.jp/>

須磨寺には「当山歴代」という、南北朝時代から江戸時代中期までの代々の住職によって書き継がれた、日記のような古記録があります。その中に、近畿一円に大きな被害をもたらした文禄五年（一五九六）の大地震についての記述があり、須磨寺は金山倒壊して死傷者も多数あり、三重塔も池に崩れ落ちたと記されています。

現在工事中の三重塔は、昭和五十九年の弘法大師ご入定一千五十年、平教盛卿八百年のご遠忌と須磨寺開創一千百年を記念して、四百年ぶりに再建されたものです。塔建立は須磨寺代々住職の悲願であり、五十九年秋の落慶法要は「相輪放光」と名付けられ、素晴らしい秋空の下で執り行われました。

相輪とは、三層目の屋根から出ている金色の部分で、露盤、伏鉢、受花、九輪、水煙、竜車、宝珠から成っています。再建に尽力された先代和尚は「水煙

の部分に、仏教の出発点を何百年後の人達にも学び取って頂きたいと思ひ、敢えて釈迦誕生像を彫りこんだ。『天上天下唯我独尊』は釈尊の根本精神であり『自覚』こそが仏教の出発点である。人間の命が尊く、犬猫や草木に至るまで自分の命が一番尊く、自分の命が尊いからこそ他の命も尊い。『独尊』こそ生命尊重の叫びであり、曼荼羅の精神に他ならない。どうか、あの水煙を通して学び取って欲しい」と、力を込めて述べておられました。

明るい光を放った相輪と鮮やかな朱色を誇った層塔も、三十年の星霜と鳩の糞害により少し色褪せてしまいました。しかし、水煙に込められた思いまでもが色褪せないよう、今年の初めより心の修復も兼ねての改修工事を開始いたしました。お陰様で工事は順調に進捗しており、本年十月二十六日には、隣接し同様に解体新築工事をしております稲荷堂の落慶法要も、併せて執り行うこととなりました。水煙に込められた思いを新たに噛みしめて、共に祝って頂けましたなら幸いです。

是非ご参拝下さい。お待ちいたしております。

大本山須磨寺 貫主

小池 弘三

彫ることは 祈ること

時は流れ

時は移り

そして時は積み重なる

昭和五十九年十月六日。空はあくまで青く晴れ渡り、顔を撫でる風もさわやかな秋の日。境内をうずめる参詣人の頭上高くに咲いた、時ならぬ蓮の花がはらりと開いて、金色燦然と輝く九輪の上に、お釈迦さまの誕生を祝った水煙がこの世に現れたときの、その感動は、いまも褪せることなく生き生きと心に残っています。

その日から三十年。十年ひと昔が三度巡って、短くもあり、長くもある歳月のなかで、悲喜交々、人も町も風景も変わりました。けれどこうして思いをこめて振り返ると、この世の出来事には偶然と言う言葉がどんどん減って、人と人の織り成す人生模様の不思議はつきることがありません。

そして今年、秋半ば須磨寺三重塔は、全容のお色直しと一部の改修工事を終えて、新たにお目見えすることとなりました。塔のご本尊金剛界大日如来さまは総金箔。三十年以前に、製作の大役を仰せつかったのは若輩の私。

そして塗師は森田鉄男、箔師は橋口肇の両氏。その当時が故に可能だったこの漆と金箔の黄金コンビの技は、歳月を越えていまもその輝きを失うことなく、ご縁日のご開帳の日差しを優しいものにされています。

そして此度、ご本尊の背後に、胎藏界大日如来さまが新たに奉納される運びとなり、引き続き製作を担当させていただくこととなりました。

図らずも、三十年の己が歴史を背中合わせに持てることの、その光栄を身に余る喜びと受け止めて、開眼の日を目指して鑿を研ぐ毎日が続いています。

今回の胎藏界大日如来さまのお身丈は、金剛界と同じ一尺五寸座像、材は総尾州松。

初春、工房に届いた松の角材は、裁断され、鉋の調整のあと、組み合わされ、風花の舞うころの吉祥日を選んで、鑿との出会いを持たれました。

木曾の山中奥深く、悠久の歳月が育てた美しい榎目と板目に向き合うときの、わくわくするような喜び、そしてまた一種のかすかな恐れ。それは仏像の彫刻を日々の暮らしと決めてから久しく年月を経て、数限りないほどの造像の経験をもつてしても、一種の儀式のように今も訪れます。

百年を遙かに超えてこの世に生を持っていたものに対する尊厳の思いは、手に慣れ親しんだ鑿を持つときことさらに体を駆け巡り、香りたつ木の香とともに、さらさらと膝の上に降り積もる木屑の、その一片一片でさえ、たとえようもなく大切なものに



思えてきます。

「彫ることは祈ること」

そして

「一刀三礼」

蠟梅から梅、桜から花木、いつか菖蒲が須磨寺公園の池を縁取り、睡蓮を掠めて燕が飛び交う五月。青葉の光の差し込む工房で、大日如来さまは少しずつそのお姿をあらわされています。

仕上がりは総截金。松の木目と截金、その出会いの妙の、弾けるような楽しさが始まるのもこれからです。

一体の仏像がこの世にお生まれになるためには、実に多くの要素が必要となります。仏師とはその中のほんの小さなひとつの歯車に過ぎません。

仏像の発信するメッセージを、かたちにあらわす為の技術は、経験で会得できるものではありません。それは開眼される方が存在し、守られ、お手を合わされる方々の存在を待つ、はじめて可能なものとなります。

仏師が目指すところのかたちは、例えば、丁寧に磨かれた透明なガラスのコップのように、中身が美しく透けて見えること。あくまでそう心がけて、毎日鑿を研いで、言い換えれば自分自身が一本の鑿となつて、木の中から生まれて来ようとしていて仏さまに向かいます。

昨今の仏像ブームに良く聞かれます。「仏像の魅力は」と。

さあ どうでしょう。

半世紀近くも木の中に仏さまのお姿を探し求めていても、魅力そのものを言葉に変えることはとても難しく、正直なところ、「良くわかりません」としか答えられません。

人には人それぞれの生き方があって、仏像との接点も、前に立たれるときの思いも、手の合わせ方もいろいろで、それはそれで良いのではないかと思います。

「仏さまに向かわれているときは、ご自分の中の仏さまが目覚まされているとき」とお聞きしたことがあります。それは彫っているときも同じことです。

須磨寺の参道にある私の工房には、須磨寺の管長さまのご好意で、一般の方々に仏像の彫刻を楽しんでいただくための須磨寺仏像彫刻会があります。毎月第一と第三の水曜日と土曜日、老若男女様々な方たちが集まって来られて、各人各様の仏像彫刻の時間を持っておられます。

その教室の中で

「仏さまをご自分の手で彫りながら、実は自分自身が彫られているような気になることがある」

と話される声を、ときどき耳にします。仏像はこの世の人々のために生まれてくるもの。生まれるべくして生まれる仏さまを、お迎えすることの出来る場にいること、仏師とはなんと幸せな仕事かと、今更ながら思いを新たに胸に手を合わせています。

須磨寺大仏師

山高龍雲

四萬六千日燈明会

ゝみあかり観音ゝ

四萬六千日とは観音様の縁日で、この日にお参りすると四萬六千日参詣したのに相当する功德を生ずると言われています。

須磨寺では本堂において初盆精霊供養の法要を執り行い、引き続き境内にろうそくで形作られた巨大な観音様のお顔、みあかり観音の前で読経し、皆様方の所願成就・萬霊供養を祈念いたします。

その後本堂前において、和太鼓奉奏などの催しもございます。ご知友お誘い合わせてご参拝下さい。



一、日 時 八月九日 午後六時より
一、会 場 須磨寺本堂前
一、供養・ご祈祷料

ろうそく	一本	千円也
祈祷札	一体	三千円也
経木供養	一霊	三千円也

◎須磨寺本堂前寺務所にてお申し込み下さい

夏・秋の行事案内

◇七月

○二十八日(月) 〰八月三日(日) 土用行(午前五時十五分) 護摩堂
○三十日(水) 寺子屋修行

◇八月

○九日(土) 四萬六千日燈明会 みあかり観音
〰午後六時〰 須磨寺 本堂

○十二日(火) 〰十五日(金) 孟蘭盆会

○十五日(金) 盆大施餓鬼法要 〰午後二時〰 本坊客殿

○十七日(日) 青葉殿孟蘭盆会法要 〰九時・十二時・十五時〰 青葉殿

○十九日(火) 盆大施餓鬼法要 〰午後二時〰 櫻寿院本堂

○二十日(水) 盆大施餓鬼法要 〰午後二時〰 蓮生院本堂

○二十日(水) 〰二十一日(木) 盆大師(縁日)

◇九月

○二十日(土) 〰二十六日(金) 彼岸会 特別護摩祈祷(午前十時・午後二時) 護摩堂

◇十月

○二十六日(日)

須磨寺三重塔改修・出世稻荷社落慶法要

落慶記念コンサート

〰午前十時〰 三重塔・出世稻荷社
藤原道山&SINSKE
〰午後六時半開演〰 須磨寺 本堂前 雨天時は青葉殿

◇十一月

○十六日(日)

神戸十三佛霊場会 開創二十周年記念行事

法要 〰午後二時〰 須磨寺 本堂

お砂ふみ 墨跡展 〰終日〰 本坊 客殿

○二十三日(日) 秋の大祭 須磨の火祭り 柴燈大護摩供 〰午前十一時〰 須磨寺



寺子屋修行

三重塔改修・ 出世稲荷新築 落慶記念法要の ご案内

一、日 時	記
十月二十六日(日)	
法要	午前十時開白
式典	午前十一時
須磨琴奉奏	午前十一時半
一、会 場	須磨寺三重塔・出世稲荷社

【三重塔改修落慶記念——奉納コンサートのご案内】

「藤原道山×SINSKE」

「尺八とマリンバによる世界最小オーケストラ」

三重塔改修・出世稲荷新築を記念して、コンサートを行います。尺八奏者の藤原道山さんとマリンバ奏者のSINSKEさんをお招きして、秋の夜長のひと時を荘厳な雰囲気の中、演奏して頂きます。どうぞ皆様、ご知友お誘いあわせて是非お越しくださいませ。

記

一、日 時 十月二十六日(日曜日) 開場 十八時

開演 十八時半

一、会 場 須磨寺 本堂前 ※雨天時は、青葉殿に変更

一、一般発売日 八月一日(金曜日) 午前十時より

一、受付電話番号 0570(02)9999

(Pコード:232・983)

一、チケット代 三千円也(一席)

※コンサートへの車での来場はご遠慮ください

※お申込みは、須磨寺事務所、全国のチケットぴあ、サークルK・サンクス、セブン・イレブンまで

尺八の新たな魅力を拓く第一人者として、邦楽のみならず幅広いジャンルで活躍中の藤原道山。5オクターブのマリンバを自在に操り、唯一無二の世界観でメロディを奏でるSINSKE(シンスケ)が共演。



藤原道山・SINSKE

● 稚児募集要項 ●

三重塔と出世稲荷社の落慶法要に伴って行う稚児行列のお稚児さんを募集いたします。須磨寺事務所受付にてお申し込み下さい。

○日時 十月二十六日(日)

午前七時半集合

○場所 須磨寺本坊書院

○締切 十月二十一日(火)

○費用 一人五千円

○年齢 満五歳から満九歳まで

○定員 三十名

○時間 九時半から十二時まで

お車で御来山予定の方は、申し込み時に当日の駐車許可証を発行致しますのでお申し付け下さい。

平成十五年本堂落慶法要
お稚児行列で管長と



須磨の火祭り

須磨の火祭りは屋外での柴燈大護摩供で、この一年を無事に終えた事を仏様に感謝し、火渡りによって身を清め新しい年を迎えるために晩秋に行います。火渡り神事とは火生三昧ともいわれ、柴燈護摩の終わりに火の上を渡る荒行です。浄火により災厄を破い福を招くといわれております。特に来年厄年を迎える方は、厄難消除のために、火渡りをして身を清め、新年をお迎えください。

入壇（火渡り）の方は当日お礼、行者手ぬぐいをお渡しします。

記

一、日 時 十一月二十三日（日曜日）午前十一時開白
一、会 場 須磨寺境内 ※荒天時は、護摩堂にて
一、ご 祈 禱 特別祈祷札 一万円・三万円・五万円
添護摩木 千円也

一、火渡り

厄年特別火渡り 五千元
一般火渡り 二千元（先着百五十名）

※火渡り神事は荒行でございます。多少のやけどもございます
申込書の注意をよくお読みのうえお申し込みください

一、お申し込み 十一月二十一日（金）までとし、
須磨寺派各寺院にお申し込みください。

平成二十七年 厄年表

平成 九年生（女性） 厄年	平成 三年生（男性） 小厄
昭和五九年生（女性） 前厄	昭和五十年生（男性） 前厄
昭和五八年生（女性） 本厄	昭和四九年生（男性） 本厄
昭和五七年生（女性） 後厄	昭和四八年生（男性） 後厄
昭和五四年生（女性） 厄年	昭和四十年生（男性） 厄年
昭和三十年生（女性） 厄年	

十三まいりのご報告

去る平成二十六年四月五日午後一時より、本坊書院に於いて、十三まいり祈願法要が執り行われました。十三まいりとは、古来より生まれ年の干支が初めて巡って来る年（数え年十三歳）に、虚空蔵菩薩様に智慧と福德と健康をお授け頂き、心身共に大人へと歩んで行く子供の成長を喜び、仏様のご加護をお祈りする行事です。

当日は天候にも恵まれ、受者七名の参集を頂きました。塔頭の住職方の読経が響く中、導師より額に虚空蔵菩薩様の種字を授かりました。法要終了後にはご家族の皆様

で記念写真をお撮りになり、各々の願いが書かれた絵馬を大師堂前に奉納され、法要は無難成満いたしました。

仏様のご加護を頂き、受者の皆様は仏様の智慧の如く慈悲の心を以って知識を活用し、優しい大人へと成長されますよう祈念いたします。

また今年から、祈願法要当日にご都合のつかない方に、後日個別にお勤めをいたしました。

来年以降、日程の都合が付かない方はお気軽にお問い合わせください。



須磨寺の歴史へ十三

― 須磨寺参詣曼荼羅(二) ―

参詣曼荼羅とは、そこに描かれた寺社への参詣を促すために描かれたものです。その寺社に関する縁起や仏事・神事などの習俗、参詣道に所在する名所・旧跡などが描かれています。

今回はこの「須磨寺参詣曼荼羅」に須磨寺がどのように描かれているのかを見ていきたいと思います。

まず中央上部を見ると、本堂を中心に左右にそれぞれ三重塔・鐘楼・奥の院・護摩堂・釈迦堂・



鎮守社が描かれています。この中でも本堂をひときわ巨大に描くことにより本尊である聖観音の秘められた存在を見る人に誇示しています。

そして本堂の前には中門と大門が描かれていますが、この中門と大門にはさまれた空間に従者を連れた貴族らしき人物が桜を見上げています。この人物は『源氏物語』の主人公である光源氏です。その光源氏が見上げている桜は、『源氏物語』須磨の巻で光源氏が植えた若木の桜です。この若木の桜は現在「若木の桜跡」として須磨寺塔頭桜壽院の北、参道の西側にあります。



また、右上の月輪の左に一本の松が描かれています。これは一ノ谷の合戦の時に源義経が腰を掛けたという伝承がある「義経腰掛松」で、現在は本堂横の大師堂前、敦盛首洗いの池の側にあります。

以上が「須磨寺参詣曼荼羅」に描かれた須磨寺の様子です。「須磨寺参詣曼荼羅」には、須磨寺だけではなく、他にも須磨の地に関する伝承が描かれています。次回はその須磨の様子をご紹介します。

今年の境内整備事業

記

一、三重塔改修工事(色塗り直し)

工期 平成二十六年一月下旬着工

七月上旬完成

施工 株式会社 金剛組

二、出世稲荷新築工事

工期 平成二十六年一月下旬着工

九月上旬完成予定

施工 株式会社 金剛組

三、寺務所横トイレ改修工事

工期 平成二十六年六月下旬着工

七月下旬完成予定

施工 株式会社 柴田工務店

平成二十六年 年忌一覽

一	周忌	平成二十五年
三	回忌	平成二十四年
七	回忌	平成二十年
十三	回忌	平成十四年
十七	回忌	平成十年
二十三	回忌	平成四年
二十五	回忌	平成二年
二十七	回忌	昭和六十三年
三十三	回忌	昭和五十七年
三十七	回忌	昭和五十三年
五十	回忌	昭和四十年
百	回忌	大正四年

献金と寄進者のご報告

◆奉納に対する御礼◆

平成 26 年 1 月 1 日～6 月 30 日

わらべ地蔵尊 奉納

松本 加奈 様

片山 悦子 様

丹谷 幸恵 様

五鈷水提灯 奉納

山崎 菜々実 様

◆皆様の献金に対する◆

感謝とご報告

平成 26 年 1 月 1 日～5 月 31 日

東日本大震災 全 5 回 2,347,200-

おぎゃー献金 全 5 回 281,272-

盲導犬 全 7 回 173,263-



あゆみ観音

～東日本大震災 被災地復興を祈念して～

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、東北・関東地方を襲った巨大地震と津波。あの大地震から早や三年が経とうとしていた今年の一月、須磨寺に一つの依頼が入りました。依頼主は大仏師・渡邊勢山先生わたなべせいざんでありました。その時、勢山先生は「あゆみ観音プロジェクト」というものを実行されていました。「あゆみ観音プロジェクト」とは、東日本大震災の時、津波で流された陸前高田の松の木を使って観音さまの像を彫るといふもので、各地でのみいれ式を行い、多くの人に「一刀」を入れて頂き、復興への祈りを込めながら、一つの観音さまを彫るというプロジェクトです。

寺など、数々の由緒あるお寺三十か所以上でのみ入れ式を行い徐々にそのお姿を現してきました。勢山先生からのご依頼は「あゆみ観音、最後ののみ入れ式を、是非須磨寺でさせて頂きたい。」というものでした。お話を聞くと、先生はプロジェクトが始まる当初から、最後は須磨寺でのみ入れ式を行いたいと考えておられたそうです。それは、二十年前大震災を経験した神戸で、同じ痛みがわかる人たちに最後にのみを入れてもらい、祈りを込めてほしいという願いからでした。

須磨寺は、勢山先生とは平成十五年須磨寺本堂改修落慶のおり、六観音像を彫って頂き、本堂にお祀りしたことからご縁がありました。「あゆみ観音」は平成二十五年三月、奈良県の當麻寺中之坊たいまだてなかのぼうに寺務局をおき、室生寺、唐招提寺、東大寺、長谷寺、信貴山朝護孫子

今年の二月十八日九時半から、須磨寺本堂にあゆみ観音さまを安置し、復興祈願法要を厳修しました。その後、勢山先生が横について、お一人お一人が復興やそれぞれの願いを込めて、のみを入れていきました。極寒の中、二百人以上の方が参加されました。皆様には、自分でのみを入れた木くずをお守袋に入れてもらい、観音さまの分身の御守としてお持ち帰り頂きました。

その後あゆみ観音さまは勢山先生の工房で仕上げられ、須磨寺で六月二十八日に完成披露と復興祈願法要が行われ、終日多くの参詣者が手を合わせて行かれました。

七月に陸前高田市に無事奉安され、開眼法要が厳粛に執り行われました。

苦しんでいる被災地の方々に我々ができることは限られています、忘れずにいること、お祈りすることがいかに大切なことか、今回改めて教えて頂きました。

お盆の由来

お盆とは「盂蘭盆会」といい、起源は「盂蘭盆経」という、お経に説かれています。

お釈迦様の十大弟子の一人、神通力第一の目連尊者が、その神通力で愛しき亡母の往く先を尋ねたところ、お母様は餓鬼道に落ちて苦しんでおられました。大変驚かれた目連尊者はお釈迦様になんとか救い出す事ができないものかと相談されました。お釈迦様は次のように諭されました。

「目連よ、そなたの母はそなたを愛するばかりに、他の子より良い物を与え、良い服を着せ、他の子よりも偉くなつてもらいたい一心で日々を送っていた。故に他者を傷つけても気が付かなかったようだ。その罪は決して軽くはないものだ」

それからお釈迦様は、七月十五日に多くの僧たちに「百味の飲食五菓」を供養することで、母親が餓鬼道の苦しみから逃れることができるとお教えになりました。目連尊者はお釈迦様の、み教えを守りお母様を救い出しました。

インドでは四月から七月が雨季にあたり、僧侶は外に出て鉢鉢や布教ができなため、精舎（お寺）に集まりお釈迦様の教えを学びます。七月十五日はその最後の日にあたり、仏教徒にとってはご先祖様を供養する縁日ともされています。

このことからご先祖さまを供養する盂蘭盆会の行事が行われる様になりました。日本では約千四百年前に推古天皇が、寺ごとに斎会を設けられたのが、盂蘭盆会のはじまりと伝えられています。

お盆は、お寺地域によつて差がありますが、七月十三日から十六日（旧暦では、八月十三日から十六日）までで、十三日の夕に「お迎え火」を焚いて、「精霊棚」にご先祖様の精霊をお迎えし、果物や菓子をお供えしてご供養します。そして、十六日の夕には「送り火」を焚いて、ご先祖様の精霊をお送りします。この間は、故郷を離れている人も実家に帰り、皆でご先祖様の精霊をご供養する風習が現在まで続けられています。

因みに餓鬼道とは、常に飢えと渴きに苦しむ亡者の世界です。生きている時に常に貪りの心をおこし、強欲だった人が死んでから餓鬼道に落ちると言われています。

お盆とは、今生きている我々が自分のことばかり考え、強欲になつていないか、反省する大切な機会でもあるのです。

また、真心をもつてご先祖様へのご供養すること自体が、布施（見返りを求めない施し）であり、我々の貪りの心を鎮めてくれるのです。



餓鬼の襖絵 丸木位里・俊夫妻作（原爆の図作者） 浅間温泉 神宮寺所蔵